

1章 マスタークラス・公開レッスン実施報告

1章 マスタークラス・公開レッスン実施報告

本事業では、プロフェッショナルダンサーとしての活躍が期待される若手を対象に、2015年度より継続して海外優秀指導者によるマスタークラスを実施している。

本年度は、2名の海外優秀指導者（ローラン・フォーゲル氏、パトリック・アルマン氏）を招聘し、日本バレエ団連盟会員団体のバレエ団においてマスタークラスを実施した。また、ローラン・フォーゲル氏による公開レッスンを劇場で行い、クラスの様子を将来プロを目指すダンサーやバレエ指導者等に対して広く公開することで、ダンサー育成環境整備の一助とした。

1-1 ローラン・フォーゲル氏によるマスタークラス・公開レッスン

講師紹介

ローラン・フォーゲル Roland Vogel

ジョン・クランコ・バレエ・スクールで学び、シュツットガルト・バレエ団に入団。『白鳥の湖』、『眠れる森の美女』、『ラ・バヤデール』などの古典バレエに主演、ジョン・クランコの『オネーギン』、『じゃじゃ馬馴らし』などの物語バレエをはじめ多くの作品を踊り、ダンサーとしてのキャリアの最後までシュツットガルト・バレエ団で活躍した。20世紀を代表する世界的振付家の数多くの作品に主演するとともに、J・ノイマイヤー、U・ショルツ、D・ビントリーらの新作の初演キャストも務めている。

1998年の長野冬季オリンピック大会の開会式でU・ショルツ振付『若い男』のパ・ド・ドゥを踊り、1999年には『オネーギン』のタイトルロールでブノワ賞にノミネートされた。

1999年から2001年にヴェルテンベルク州立歌劇場の教育訓練プログラムに参加、ジョン・クランコ・スクールでクラシック・バレエ教師の資格を取得した。ダンサーとしてのキャリアを終えると直ちに教師に転じ、



マリカ・ヴェズブラズヴァに招かれモナコのプリンセス・グレース・バレエ・アカデミーの教師陣に加わる。以来、現在のディレクターであるルカ・マサラの下でダンサーの育成にあたり、スクールのために多くの作品を振り付けている。カンヌ・ロゼラ・ハイタワーのゲスト教師、また、中国、日本では様々なスクールにおいてワークショップ指導を行っている。北京の中国国立バレエ団にはゲスト教師として定期的に招かれ、クランコの『オネーギン』、『ロメオとジュリエット』、U・ショルツの『第七交響曲』、『白鳥の湖』などを指導した。

東京のNBAバレエ団のコンクール審査委員会メンバー、ニューヨークのユース・アメリカ・グランプリの審査員を務め、2011年の第一回北京国際バレエ・コンクールにはゲスト教師として招かれた。2014年に振り付けた『オーゲンブリック』パ・ド・ドゥは、北京舞踏学院60周年記念のオープニングで踊られ、モンテカルロ・バレエ団の協力を得てプリンセス・グレース・アカデミーでも上演された。

● マスタークラス実施概要

東京バレエ団：2024年8月12日（月）～16日（金）（2クラス×5日）

東京シティ・バレエ団：2024年8月19日（月）～23日（金）（2クラス×5日）

指 導：ローラン・フォーゲル

<マスタークラスの様子>



(東京バレエ団) / ©The Tokyo Ballet



(東京シティ・バレエ団)

<参加者の声>

- 改めて基礎、基本の大切さを実感した。
- 今後も毎日のクラスを、新鮮な気持ちでうけることや、日々のレッスンで音楽を感じ、楽しむことを忘れないようにしていきたい。
- とてもアカデミックなレッスンで、慣れて忘れてしまっていた意識やレッスンに対する心構えを改めて指摘し指導してくださった。
- 沢山の発見のあるとてもいいクラスだった。同じパでも普段とは違うアプローチの仕方もあるアドバイスを頂けてとても勉強になった。プリエとタンジュがいかに大事か、改めて実感した。何より先生のお手本も美しく、目で見ても学べてもっと受けたいと思った。
- 先生の知識の豊富さ、またバレエや音楽への熱意や敬意がレッスンにも現れていて、ダンサー達の意識も身体も5日間でどんどん変化していった。伝え方にも学ぶ事が多く、私自身もこれから、活かしていきたいところがたくさんあった。
- 情熱を持って時には厳しく愛を持って指導してくださった。パの意味、どの筋肉をどのように使うか、生徒にはこのように教えるがプロフェッショナルはこのようにした方が良い、ミュージカルティ、呼吸が大切など…現役ダンサーのみならず指導者にとっても勉強になるクラスだった。ぜひまた指導を受けたいと思う。
- 音の取り方について沢山アドバイスいただいた事が印象に残っている。
- 「日本人ダンサーは音の取り方や角度の付け方が甘い」というご指摘をうけ、その後のクラスではカウントの取り方とアクセントの付け方を先生のお手本を見て忠実に行うこと、顔や体の角度をいつも以上につけることを意識している。
- クラス受講をしてから、付け根がくの字にならないように、しっかりとお腹を引き上げ、背中もしっかり立てることを癖づけられるよう、意識し続けている。
- 5日間クラスを受けただけでも、少し筋肉の付き方が変わったと実感している。先生からも正しい位置でレッスンをしていれば、1年後にはきっと綺麗なラインの体、脚の形になっているはず、という言葉をいただいた。そのように変化した姿を見て頂けるように、教えていただいたことを、日々考えながらレッスンしていきたいと思う。
- バーレッスンの時の1番ポジションや5番ポジションがどれだけ丁寧に出来ているか。そこで出来ていなければ、バーが無くなった時にしっかりと立てない、と指導していただいたことを忘れないようにしたい。
- 教師として、手本の見せ方だったり、音楽性の伝え方など、時にはユーモアを交え、とにかく、基礎を熱意を持って根気強く、伝え続ける事が重要なんだなと感じた。

● 公開レッスン実施概要

「ローラン・フォーゲルのバレエ公開レッスン2024」

日 時：2024年8月25日（日）9：30～10：30

会 場：めぐろパーシモンホール 大ホール（「第12回めぐろバレエ祭り」会場）

指 導：ローラン・フォーゲル

ピアニスト：星 弘美

通 訳：ブラウリオ・アルバレス（東京バレエ学校教師／元東京バレエ団）

実 技：東京バレエ団のダンサー 計54名

見学者：計419名（事前申込制・無料／対象：小学校1年生以上）

<公開レッスンの様子>



©Koujiro Yoshikawa / The Tokyo Ballet

<公開レッスン見学者の声>

- 体の使い方や、音の取り方や表現力について、これまで以上に意識する機会となった。
- バレエの身体の使い方がとても参考になった。
- 指先や、目先、鼻の先まで気を配ることで、美しいバレエになるのだなと思った。
- 背中からの腕の使い方や、つま先の軌道についての指導が参考になった。
- 直接体の動きについて指示するだけでなく、「爪先まで笑顔で」のように意識の持ち方についての指導が効果的で素晴らしいと感じた。
- 気分を上げながら集中もされているレッスンの様子が大変参考になった。
- 舞台上で先生がとらえている空間やリズムが本物だなと強く感じ、感動した。

1-2 パトリック・アルマン氏によるマスタークラス

講師紹介

パトリック・アルマン Patrick Armand

マルセイユ生まれのパトリック・アルマンは、ルディ・ブライアンズと母のコレット・アルマンに教えを受け、マルセイユ・バレエ学校で学んだ。1980年にローザンヌ賞を獲得し、引き続きスクール・オブ・アメリカン・バレエとカンヌの国際ダンス・センターで研鑽を積んだ。1981年にフランス・バレエ・シアターに入団、1983年にプリンシパル・ダンサーに昇格。同年、ルドルフ・ヌレエフ共演によるベジャールの「さすらう若者の歌」でローレンス・オリヴィエ賞にノミネートされた。1984年、ペーター・シャウフスの招きでロンドン・フェスティバル・バレエ（現イングリッシュ・ナショナル・バレエ）に入団し、ブルース・マークス監督の下、1990年にボストン・バレエに移籍するまで6年間、同団で踊った。

レパートリーには、アシュトン、バランシン、クランコ、マクミラン、プティ、テトリー、ファン＝マーネンによる振付作品の主役が多数含まれる。中でも、1988年にロンドン・フェスティバル・バレエが世界初演したナタリア・マカロヴァ版の「白鳥の湖」で、ジークフリートを演じたことは特筆に値する。イギリスの雑誌「ダンス・アンド・ダンサーズ」の投票により、彼は同年の年間ベスト・ダンサーに選出された。また、ボーボット、ブルース、サーブ、ウィールドン等の振付家が彼のために作品を創作している。ゲスト・アーティストとしては、オーストラリア・バレエ団、バイエルン国立バレエ、ベルリン・ドイツ・オペラ・バレエ団、キーロフ・バレエ、小林紀子バレエシアターに出演している。2002年、マルセイユのコレット・アルマン・バレエ・スタジオの監督を引き継いだ。ゲスト教師としては、特に、英国ロイヤル・バレエ団および附属バレエ学校、カナダ国立バレエ団および附属バレエ学校、ミラノ・スカラ座バレエ団で、頻繁に指導を行っている。

2003年、東京の新国立劇場において、小林紀子バレエ・シアターのために「ライモンダ」第3幕の共同演出を行った。2006年、ミラノ・スカラ座の教師及びバレエ・マスターに任命された。また、ザグレブのクロアチア国立劇場のために「ドン・キホーテ」のプロダクションを振り付け、2010年6月に初演された。

1998年と2009年にローザンヌ・バレエ・コンク



ルの審査員を務め、2010年から2020年まで同コンクールの公式男性コーチ及び教師を務めた。2010年にサンフランシスコ・バレエ・スクール研修生プログラムのトップに任命され、2012年9月1日に同校の副校長に就任。名誉座長を務めた2017年のスチューデント・ショーケース・ディナーにおいて、同校の校長に指名された。2023年シーズンの終わりに、サンフランシスコ・バレエ・スクールの校長を辞任しフリーとなり、さまざまな国でバレエの指導・コーチングに取り組んでいる。

● マスタークラス実施概要

貞松・浜田バレエ団：2024年11月4日（月祝）～8日（金）（2クラス×5日）

スターダンサーズ・バレエ団：2024年11月11日（月）～15日（金）（2クラス×5日）

指 導：パトリック・アルマン

<マスタークラスの様子>



(貞松・浜田バレエ団)



(スターダンサーズ・バレエ団)

<参加者の声>

- 正しいポジションや繋ぎの動きなどの徹底したバレエの基礎に加えて、ポイントとなる音楽の使い方なども教えていただき、ダンサーとして、また子供たちを指導する上でも大変学びが多いクラスだった。
 - 改めて基本の大切さを再認識した。バレエスクールの教師をされていたこともあり、個々のコンディションを尊重しつつも譲らない所が随所にあり、連日繰り返し基本を注意されていて、久しぶりにスクール生に戻ったような感覚で取り組んだ。普段のバレエ団の音のテンポよりゆっくりだったので、きちんとパの始まり、終わりそしてつながりを意識しないと無駄な力が入ってしまうため、コーディネーションをよく意識するようにした。
 - パトリック・アルマン先生のクラスはとにかくアカデミック。印象的だったのは、腕の付け方が全て指定されていたこと。道理にかなった動きは、表現をする上で必要不可欠であるのだと改めて感じ、もう一度自身を見直すきっかけとなった。
 - 基礎的なことを細かく丁寧に説明していただいた。気になれば音を止めて一人一人に細かく指導していただき学生時代を思い出すようなクラスだった。基礎を大切にした上で、どう踊りに発展させていくかなどを考えることができ毎日ワクワクして、とても実りのある5日間だった。
 - アカデミックかつ的確な指導で、プロになりおろそかになりがちだった部分を省みるとても良い機会になった。指導期間を通して、段々お互いにコミュニケーションも取れ、音楽性の話やメンタルのことなど時折笑いも挟みながら貴重な話を聞くこともできた。
 - シンプルなアンシェヌマンを通して明確な注意を頂けるクラスだった。バーレッスンではご自身も動いて見せてくださり、気をつけるポイントがわかりやすかった。バーの手に力を入れないことや、軸足になっている腰を引き上げるなど、自分ではやっているつもりだったが十分でなかったことを直接注意して頂き、普段のクラスレッスンを見直す良いきっかけになった。
- センターレッスンではどのように動くかをハッキリと合理的に教えていただいた。例えばピルエットでは一つの注意ではなく、これができるようになったら次はこれを注意する、のように段階的に注意を頂けたので、自分の体の使い方を修正することが出来た。また、特に印象的な注意として、大きなジャンプの時に、早くアームスをつくり、最後までアームスを崩さずプリエで吸収しきるというのが、今までの自分にはなかったものだった。
- 注意だけではなく、良い動きをしたときは個人個人にvery goodなどと褒めてくださることも意欲的にクラスレッスンに取り組める要因になった。先生自身も早くにスタジオに入って入念なウォーミングアップをされていたのも印象的で、その姿勢から、クラスへの熱意を感じた。ぜひまたクラスレッスンを受けたいと思う。